

特63-324

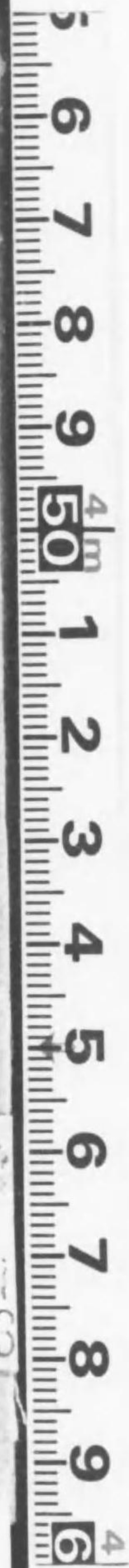


1200800265206

佐々木信綱新訂

鎌倉右大臣家集

覆刻堂

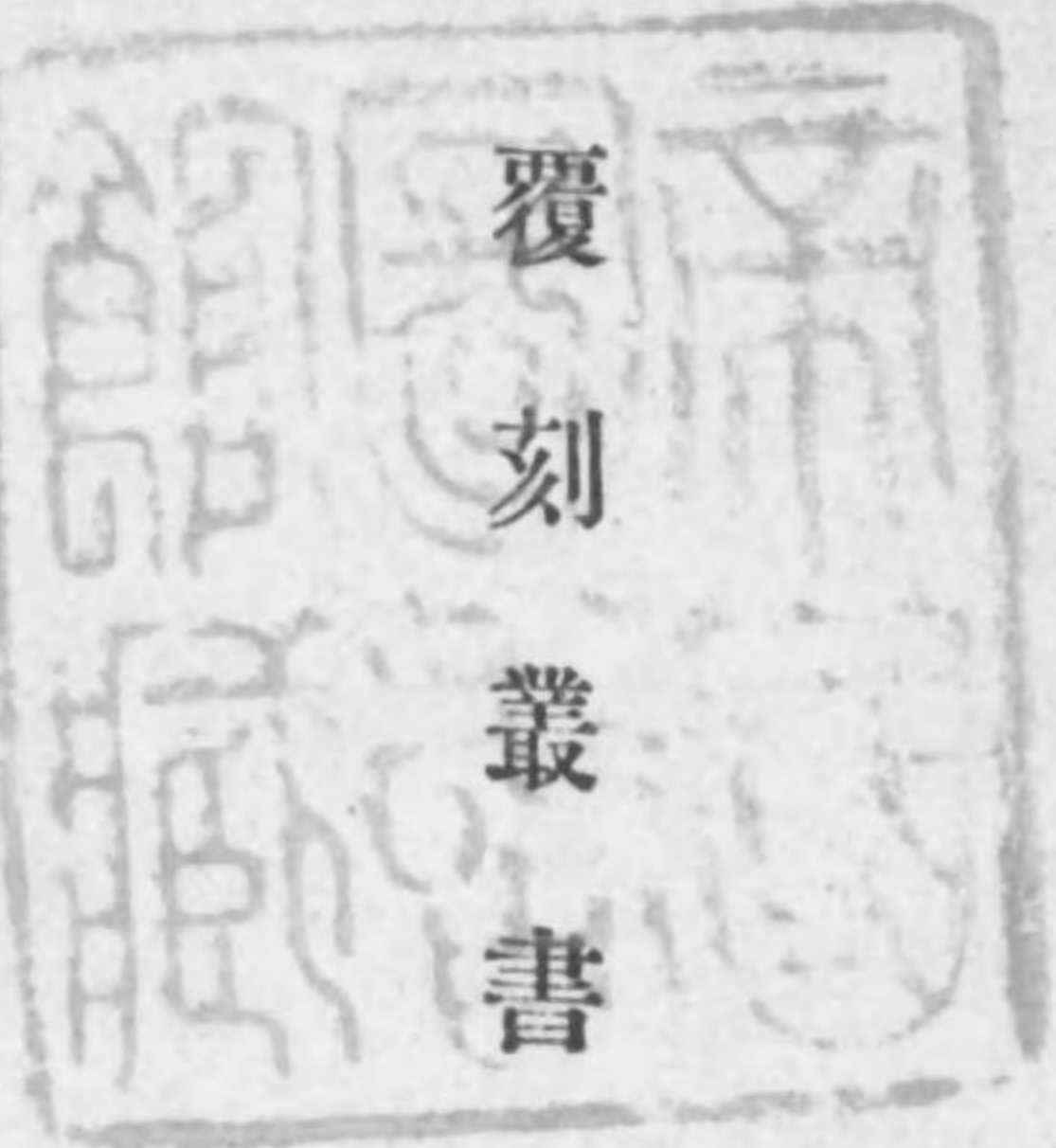


始



特63

324



覆
刻
叢
書

第
一
卷



明治

37 2 10

内交

- 一 覆刻叢書は有用なる古書を覆刻す
- 一 覆刻叢書は時に従つて材を擇ぶ
- 一 覆刻叢書は植字の正確を期すると
共に舛裁の簡潔を尙ふ

凡 例

- 一 鎌倉右大臣家集一に金槐集といふ舊本元二種あり一は普通行はるゝ所の單行本にして一は瑠氏の群書類従本たり
- 一 群書類従本は諸書参照前記單行本をも併合し加ふるに精嚴なる校正を以てしたりと雖も猶假字遣等に於て誤謬無きに有らず
- 一 本書は即右群書類従を以て原本となし別に實朝の歌調に對する賀茂眞淵が總評を附したるもの今再版發行に當りて更に佐々木信綱氏を煩して假名遣等の誤謬を訂正したれば金槐集として或は完璧に庶幾きの書たらん歟

甲辰晩冬

編 者

金槐和歌集

佐々木信綱校訂

春

○正月一日よめる。

けさみれは山も霞て久かたの天の原より
春はさにはけり

○立春のころをよめる。

九重の雲井に春を立ぬらし大内山に霞た
なひく

○故郷立春

朝霞たてるを見ればみつの虹のよし野の
宮に春はきにけり

○春のはじめに雪の降をよめる

かきくらしなほ降雪の寒ければ春ともし

らぬ谷の黄鳥

春た^{はまつ新千}は若菜摘んとしめちきし野へとも

見えす雪のふれは

○春のはじめのうた

うちなひき春さりくれは楸生るかた山陰
に鶯をなく

山里に家居はすへし鶯の鳴はつ聲のきか
まほしさに

○屏風の繪に春日の山に雪ふれるところを讀る

松の葉の白きをみれば春日山このめもは
る雪をふりける

○わかなたつむところ

春日野の飛火の野守けふとてやむかし
かたみに若菜つむらん

○雪中のわかたといふ事を

若菜つむ衣手ぬれて片岡のあしたの原は

あわ雪そふる

○梅のはなをよめる

梅かえに氷れる霜やとけぬらんほしあへぬ
露の花にこぼるゝ

○屏風に梅の木に雪降かゝれる所

梅のはな色はろれともわかぬまで風にみ
たれて雪は降つゝ

○うめの花さけるところをよめる

わかやとの梅の初花咲にけりまつ鶯はな
とか來なかぬ

○花のあひだの鶯といふ事を

春くれはまつ咲やとの梅のはなかをなつ
かしみ鶯そなく

○梅花風に匂ふと云事を人々に讀せ侍し次に

うめか香を夢の枕にさそひきてさむる待
けり春の山風はつイ

○梅香薰衣

梅か香は我衣手に匂ひきぬ花より過る春
のはつ風

○梅のはなをよめる

春風は吹とふかねと梅のはな咲るあたり
はしるくそ有ける

○春の歌

早蕨のもぬいつる春に成ぬれは野邊の霞も
たな引にけり

○かすみをよめる

三冬つき春しきぬれは青柳のかつらき山
に霞たな引
おほかたに春の來ぬれははる霞四方の山
へに立滿にけり

あしなへて春は來にけり筑波根の木の本
毎にかすみたなひく

○柳をよめる

春くれはなほ色まさる山城の常盤の杜の
青柳の糸

○雨中の柳といふとを

浅みとり染てかけたる青柳の糸に玉ぬく
春雨ろふる
水たまる池の坡のさし柳この春雨にもえ
出にけり

○柳

青柳の糸もてぬける白露の玉こき散す春
の山かせ

八

○雨をぼふれる朝。勝長壽院の梅とてろく／＼咲
たるを見て。花にむすひつけし歌

古寺のくち木の梅も春雨にそほちて花の
綻にけり

○雨後鶯といふ事を

春雨の露もまたひぬ梅かえにうは毛しを
れて鶯をなく

○梅華厭雨

我宿の梅はなさけり春雨はいたくな降そ
ちらまくもをし

○故郷梅花

誰にかもむかしをとはん故里の軒端の梅
は春をこそしれ
としふれは宿はあれにけり梅花はなはむ
かしの香に匂へとも
古郷にたれしのふとか梅のはなむかし忘
れぬかに匂ふらん

○古郷春月といふ事をよめる

故郷は見しともあらずあれにけり影そ昔
 の春の夜の月
 たれ住て誰なかむらん古郷の吉野のみや
 の春のよの月

○春月

なかむれは衣手かすむ久方の月の宮故の
 春の夜のそら

○梅花をよめる

我宿の入重のこら梅咲にけり知もしらぬ

もなへてとはなん
 鶯はいたくなわひそ梅のはなことしのみ
 散ならひならねは
 さりともと思ひしほとに梅のはな散過る
 まて君かきまさぬ
 わか袖に香をたに残せむめの花あかて散
 ぬる忘かたみに
 梅のはな咲る盛をめのみまへにすくせる宿
 は春そ少なき

○呼子鳥

あをによし奈良の山なる呼子鳥いたくな
鳴そ君もこなくに

○すみれ

浅茅原ゆくへもしらぬ野へに出て故里人
は董つみけり

○さゝす

高圓の尾上の雉子朝なく妻にこひつゝ
啼音悲しも
おのか妻戀わひにけり春の野にあさる雉
子の朝なくなく

○名所櫻

よとに聞よしの、櫻咲にけり山の麓にか
ゝるしら雲

○とほき山の櫻

かつらきやたかまのさくらなかむれは夕
るる雲に風そ吹新後春雨そふる

○雨中櫻

雨ふると立かくるれは山さくら花の葉に
そほちぬるかな
けふもまた花に暮しつ春雨の露のやとり

を我にかさなん

○山路夕花

道とほみけふ越くれぬ山櫻はなのやとり
を我にかさなむ

○春山月

風さわく遠のと山に空晴てさくらに曇る
春のよの月

○屏風のゑに。旅人あまた花の下にふせる所

木の本の花のした臥夜ころへて我衣てに
月を馴ぬる

木のもとにやとりはすへし櫻花ちらま
をしみ旅ならなくに
この本にやとりをすれはかたしきの我衣
てに花は散つゝ
いましはと思ひし程に櫻はな散木の本に
日數へぬへし

○山家に花見るところ

時のまとおもひてこしを山里に花みるく
となかるしぬへし

○花ちれるところに。鴈のとぶを

雁かねの歸る翅にかをる也花をうらむる
春の山かせ

○きさらきの廿日あまりのほどにや有けむ。北
むきのえんに立出て。夕暮の空をながめて。

一人をるに。雁のなくを聞いてよめる。

なかめつゝおもふも悲し歸雁ゆくらんか
たの夕くれのろら

○ゆみあそびをせしに。よしのゝ山のかたをつ

くりて。山人の花みたるところをよめる。

み吉野の山のやまもり花をみてなか
し日をあかすも有哉

みよしのゝ山に入れんやま人と成みてし
かな花にあくやと

○屏風によしの山かきたる所

みよし野の山にこもりし山人や花をはや
との物とみるらん

○故郷花

里はあれぬ志賀の花園そのかみのむかし
の春や戀しかるらん
たつねても誰にかとはん古郷の花もむか
しのあるしならねは

○はなをよめる

櫻花ちらまくをしみうち日さす宮路の人
そま^{との}とゐせりける

さくら花ちらはをしけむ玉鉾の道行ふり
に折てかさゝん

道すから散かふ花を雪とみてやすらふほ
とに此日暮つゝ

○人のもとに讀てつかはし侍し

春は^{イ先}くれと人もすすさめぬ山櫻風のたより
に我のみそとふ

○山家見花といふ事を人々あまたつかうまつり

し次に

さくらはな咲散みれは山里に我そおほく
の春はへにける

○屏風に。山中に櫻咲たるところ

山櫻散はちらなんをしけなみよしや人み
す花の名たてに

○花をたづねぬといふ事を

花をみむとしも思はてこし我そ深き山ち
に日數へにける

○屏風の畫に

山風の櫻吹まく音すなり吉野の瀧の岩も
とゝろに

瀧の上のみふねの山のやま櫻風に浮てる
花も散ける

○散花

春くれはいとかの山のホイやま櫻風にみたれ
て花を散ける

○花かせをいとふ

咲にけりなからの山の櫻はな風にしられ

て春も過なん

○はなをよめる

三よし野の山下陰のさくら花咲てたてり
と風にしらすな

○名所ちるはな

さく花うつろふ時はみよしの、山下風に
雪をふりける

○花雪に似たるといふ事を

風吹は花は雪とそちりまかふ吉野の山は
春やなからん

山深み尋てきつる木の本に雪とみるまで
花を散ける

春は来て雪は消にしこのもとに白くも花
のちりつもあるかな

○雨中夕花

山さくくらいまはのころの花のえに夕への
雨の露そこほるゝ
やま櫻あたに散にし花のぬにゆふへの雨
の露そいの残れる

○落花をよめる

春ふかみあらしの山の櫻はな咲とみしま
に散にけるかな

○三月の末かた勝長壽院にまうてたりしに。あ
るそう山陰に隠れをるを見て。花はとゝひし
かば。散ぬとなんこたへ侍しを聞て讀る。

ゆきて見んと思ひし程に散にけりあやな
の花や風たゝぬまに
櫻はなさくとみしまに散にけり夢かうつ
ゝか春の山風

○水邊落花といふ事を

櫻はなちりかひかすむ春の夜のおほる月

夜のかもの川風
行水に風の吹いる、櫻はななかれて消ぬ
あわかともみゆそみるイ
山さくら木々の梢に見しものを岩まの水
のあわとなりぬる

○湖邊落花

山風の霞吹まきちる花のみたれてみゆる
しかの浦なみ

○故郷惜花心を

さゝ浪やしかの都の花盛風よりさきにと

はまし物を

散ぬれはとふ人もなし故郷は花そむかし
のあるじ成ける
ことしさへとはれて暮ぬ櫻はな春もむな
しき名に社有けれ

○花恨風

心うき風にも有かな櫻花さくほともなく
散ぬへらなり

○春風をよめる

櫻花さきてむなしく散にけり吉野の山は

たし、春の風

○櫻をよめる

春ふかみ花ちりかゝる山の井のふりにし
水に蛙なく也

○河邊欸冬

欸冬の花の雫に袖ぬれて昔おほゆる玉川
の里
やまふきの花の盛に成ぬれば井手のわた
りにゆかぬ日そなき

○山吹を見てよめる

わかやとの八重の山吹露をおもみ打はら
ふ袖のかをりぬる哉

○雨のふれる日山吹を讀る

春雨の露のやとりを吹風にこぼれて匂ふ
欸冬の花

○欸冬を折りてよめる

今幾日春しなければ春雨にぬるとも折ら
んやまふきの花

○欸冬の花をりて。人のもとにつかはすとて

あのことから哀ともみよ春ふかみ散残るさ

しの山吹の花

散のこる岸の山吹春深み此一えたをあは
れといはん

○やまふきの散を見て

玉もかる井出の河風吹にけりみなわにう
きぬ山ふきの花

たまもかる井出のしからみ春かけて咲や
川瀬の山ふきの花

○まゆみのふりうにて。大井川をつくりて松
に藤のかゝるところ

立歸りみてをわたらん大井河かはへの松
にかゝる藤波

○屏風の書に。田籠の浦に旅人のふぢのはな折
りたる所

田籠の浦のさしの藤波立かへり折らては
ゆかし袖はぬるとも

○池のほとりの藤の花

古郷の池の藤なみ誰うゑてむかし忘れぬ
かたみ成らん

いとはやも暮ぬる春かわか宿の池の藤波

うつろはぬまに

○正月の二有し年三月に郭公の鳴を聞てよめる

きかさりき彌生の山の郭公春くはゝれる
年はありしかと

○春のくれをよめる

春ふかみあらしもいたく吹宿は散残へき
花もなきかな
なかめこし花もむなしく散はてゝはかな
く春の暮にける哉
いつかたに行かくるらん春霞立出て山の

端にもみえなくに

行春をかたみとおもふ天津空在明の月は
かけもたぬけり

○三月盡

惜ひとも今宵明なはあすよりは花のたも
とをぬきてかへてん

夏

○更衣をよめる

おしみこし花の袂もぬきかへつ人の心を
夏には有ける

○夏のはじめのうた

夏衣たつ田の山の郭公いつしかなかなん聲
をきかはや
春過て幾日もあらねと我やとの池の藤な
みうつろひにけり

○郭公を待といふ心を

夏衣たちしときより足曳の山郭公待ぬ日
そなき
子規きくとはなしにたけくまの松にそ夏
の日數へぬへき

初聲をきくとはなしに今日もまた山時鳥
またすしもあらず
郭公かならす待となけれとも夜なくめ
をもさましつる哉

○山家郭公

山近く家居しをれは蜀魂なく初聲は我の
みそきく

○ほととぎすのうた

足曳の山郭公木かくれて目にこそみえね
あとのさやけき

らきやたかまの山の杜宇雲井のよそ
に啼渡る也

足曳の山時鳥み山出て夜深き月の影にな
くなり

在明の月は入ぬる木の間より山子規啼て
いつなり

みな人の名をしもよふかほととぎす鳴な
る聲の里をとよむる

○夕郭公

夕暮のたどくしきに郭公聲うらかなし

道やまとへる

○夏歌

五月はつ小田のますらをいとまなみせき
いるゝ水に蛙なく也

○菖蒲

五月雨に水まさるらし菖蒲草うれはかく
れてかる人そなき

○五月雨ふれるに。あやめ草をみてよめる

袖ぬれてけふふく宿の菖蒲草いつれの沼
に誰かひきけん

○五月雨

さみたれは心あらなん雲まより出くる月
 をまてはくるしも
 五月雨に夜の更ゆけは郭公ひとり山邊を
 鳴てすく也
 さみたれの露もまたひぬ奥山の楨のはか
 くれなく郭公
 五月雨の雲のかゝれるまきもくの檜原か
 峯に啼子規
 五月山こ高き峯のほとゝきすたそかれ時

の空になく也

○故郷盧橘

いにしへを忍ふとなしに故郷の夕への雨
 に匂ふたちはな

○盧橘薰^{イ先}夜衣^一

轉寐の夜の衣にかほる也もの思ふ宿の軒
 の立花

○ほとゝぎすをよめる

蜀魂きけともあかす立花のはな散里の五
 月雨の頃

○社頭時鳥

さみたれをぬさに手向て三熊野の山郭公
なきとよむ也

○雨いたくふれる夜ひとり郭公を聞てよめる

郭公鳴聲あやな五月やみ聞人なしに雨は
降つゝ

○深夜ほととぎす

五月やみおほつかなきに郭公ふかき峯よ
り鳴ていつ也
五月やみ神なひ山のほととぎす妻戀すら

しなく音悲しも

○蓮露似玉

小夜更てはすの浮葉の露の上に玉とみる
まてやとる月かけ

○河風似秋

岩くゝる水にや秋の立田川かはかせ涼し
夏の夕暮

○螢火亂飛秋已近といふ事を

杜若おふる澤邊に飛螢かすこそまされ秋
や近けん

○蟬

夏山に鳴なる蟬の木隠て秋近しとや聲も
をしまぬ

四〇

○みな月の廿日あまりの比。夕への風すだれを
うごかすをよめる

秋近くなるしるしにや玉たれのこすのま
とほし風そ涼のイしき

○夜風冷衣と云事を

夏深み思ひもかけぬうたゝねの夜の衣に
秋風そふく

○夏の暮によめる

昨日まで花の散をそをしみこし夢かうつ
ゝか夏も暮にけり
御蔭する河瀬にくれぬ夏の日の入あひの
鐘のそのこゑにより
夏はたゝこよひはかりと思ひねの夢ちに
すゝし秋のはつ風

秋

○七月一日の朝によめる

昨日こそ夏は暮しか朝戸出の衣手寒し秋

のはつ風

○海邊秋來といふとを

霧立て秋こそ空に來にけらし吹上の濱の
浦のしほ風
うちはへて秋はきにけり紀の國やゆらの
み崎の蛩のうけ細

○寒蟬啼

吹風の涼しくも有かおのつから山の蟬鳴
て秋はきにけり

○秋のはじめの歌

住人もなき宿なれと萩の葉の露を尋て秋
はきにけり
野と成て跡は絶にし深草の露のやとりに
秋はきにけり

○白露

秋は、や來にける物を大かたの野にも山
にも露そおくなる

○秋風

夕されは衣手さむし高まとの尾上の宮の
秋の初風

なかむれは衣手寒し夕つくよさほの河原
の秋の初かせ

○秋のはじめによめる

あまの河みなわさかまき行水のはやくも
秋の立にける哉
久かたの天の河原を打なかめいつかと待
し秋もきにけり
彦星の行あひをまつ久堅の天の川原に秋
風そ吹
夕されは秋風涼し七夕のあまの羽衣たち

やかふらん

○七夕

天河霧立わたる彦星の妻むかへ舟はちも
こかなん
戀くて稀に逢夜の天河川瀬のたつはな
かすもあらなん
七夕の別を惜しみ天河やすのわたりにた
つもなかなむ
今はしも別もすらししたなはたは天の河原
に田鶴そ鳴なる

○秋のはじめ。月あかりし夜

天原雲なきよひに久堅の月さへわたる鵲のはし

秋風に夜のふけゆけは久かたの天の河原に月かたふきぬ

○七月十四日夜勝長壽院の樓に侍りて。月のさ

し入りたりしをよめる

なかめやる軒の忍ふの露のまにいたくな更そ秋のよの月

○曙に庭の萩を見て

朝ほらけ萩のうへ吹秋風に下葉おしなみ露を翻る

○秋野におくしら露は玉なれやといふとば。人

々におほせて。つかうまつらせし時よめる

さゝかにの玉ぬく糸のを、よわみ風に亂て露そこほる、

○あきのうた

花におく露をしつけみ白すけの眞野の萩原しをれあひけり

○路頭萩

道のへの小野の夕霧立かへりみてこそゆ
かめ秋萩の花

○草花をよめる

野邊に出てそほちにけりなから衣きつゝ
分行花の車に

○蘭

藤はかまきてぬきかけしぬしや誰とへと
答へす野への秋風

○とかりしにとがみが原といふ所に出侍しとき。
あれたる菴のまへに蘭さけるをみてよめる

秋風に何にほふらんふちはかまぬしはふ
りにし宿としらすや

○古郷萩

古郷の本あらの小萩徒に見る人なしに咲
かちりなん

○庭のはぎをよめる

秋風はいたくな吹そ我宿のもとあらの小
萩ちらまくもをし

○夕秋風と云事を

秋ならてたゝ大かたの風の音も夕へはと

に悲しきものを

○ゆふへの心をよめる

おほかたにももの思ふとしもなかりけり只
我ための秋の夕暮

たそかれに物思ひをれは我宿の萩のはそ
よき秋風そ吹

我のみやわひしと思ふ花すゝきほに出る
やとの秋の夕くれ

○庭の萩はづかにのこれるを。月さしいてのち見
るにちりにたるにや。花のみぬざりしかば。

萩の花くれく／＼までも有つるか月出てみ
るになきかはかなさ

○萩をよめる

秋萩の下葉もいまたうつろはぬに今朝ふ
く風は袂さむしも

○あさがほ

風をまつ草の葉におく露よりもあたなる
ものは朝顔の花

○野へのかるかやをよめる

夕されは野ちのかるかや打なひきみたれ

てのみろ露も置きける

○秋歌

朝な／＼露に折れふす秋萩の花ふみした
き鹿そ鳴なる
萩かはなうつろひ行は高砂の尾上の鹿の
なかぬ日そなき
さを鹿のゝのかすむ野の女郎花はなにあ
かすと音をや鳴らん
よそにみて折らては過し女郎花なをむつ
ましみ露にぬるとも

秋風はあやなく吹そ白露のあたなるのへ
の葛のはの上に
白露の仇にもおくか葛の葉にたまれはき
えぬ風たゝぬまに
さり／＼す啼夕暮の秋風に我さへあやな
物ろかなしき

○山家眺望邊イといふとを

暮かゝる夕への空をなかむれはこたかき
山に秋風そふく
秋をへて忍ひもかねす物思ふ小のゝ山邊

の夕暮の空

聲高みはやしにさけふ猿よりも我そもの
思ふ秋の夕へは

○秋のうた

玉たれのこすのひまもる秋風はいも戀し
らに身にそしみける
秋風はやゝはた寒く成にけり獨やねなん
長き此夜を
雁なきて秋風さむく成にけりひとりやね
なむ夜の衣うすし

を篠はら夜半に露吹秋風をやゝ寒しとや
虫のわふらんなくイ
秋ふかみ露さむきとや夜のイ蚕たゝいたつらに
音をのみそ鳴
庭草の露のかすそふ村雨によふかき虫の
聲を悲しき
あさち原つゆしけき庭の蚕秋ふかき夜の
月に鳴也
天のはらふりさけ見れば月清み秋のよい
たく更にける哉

○月をよめる

我なからおほねす置くか袖の露月に物思
ふ夜頃へぬれは

○八月十五夜

久かたの月の光し清けれに秋のなかはを
空にしるかな

○海邊月

たまさかにみるものにもか伊勢の海の清
き渚の秋の夜の月
伊勢の海や浪にかけたる秋の夜の有明の

月に松風そふく
須磨の蟹の袖吹かへすしほ風にうらみて
更る秋のよの月
しほかまの浦ふく風に秋たけて籬か島に
月かたふきぬ

○月前雁

天原ふりさけみれはます鏡きよき月夜に
雁なき渡る
ぬは玉の夜は更ぬらし雁かねの聞ゆる空
に月かたふきぬ

啼渡る雁の羽かせに雲消て夜ふかき空に
すめる月かけ
九重の雲井を分て久かたの月の都に雁そ
なくなる
天のとを明かたの空に啼雁の翅の露にや
とる月影

○海の邊をすぐるとてよめる

和田の原八重の蘆ちに飛雁の翅の浪にあ
き風そふく
なかもわひゆくへもしらぬものと思ふ和新田の原八重のし

ほ路の秋の黄昏

○雁を

秋風に山とひこゆる初かりの翅に分る峯
のしら雲
足曳の山飛こゆる秋の雁いく重の霧をし
のき來ぬらん
雁かねは友まとはせりしからきや楨の柚
山霧たゝるらし

○夕雁

夕されは稻葉のなひく秋風に空飛かりの

聲も悲しや

六〇

○田家夕雁

雁のゐる門田の稻葉打そよきたそかれ時
に秋風そ吹

○野べの露

ひさ方の天飛雁そらいの涙かも大あらし野のさ
ゝの上の露

○田家露

秋田もる庵にかたしく我袖に消あへぬ露
の幾重おく蘭

○田家夕

かくて程たえてしあらはいかゝせん山田
守庵の秋の夕暮

○田家秋といふとを

から衣いなはの露に袖ぬれて物思へとも
なれる我身か
山田もる庵にしをれは朝なくたえす聞
つるさをしかの聲

○夕鹿

鳴鹿の聲より袖に置くか露物思ふころの

六一

秋の夕暮

○しかをよめる

妻戀る鹿ろなくなる小倉山やまの夕霧立
 にけんかも
 ゆふされは霧立くらしをくら山やまのと
 かけに鹿ろ鳴なる
 雲のゐる梢はるかに霧こめてたかしの山
 に鹿そ啼なる
 小夜更るまゝに外山の木のまよりさそふ
 か月をひとりとり鳴鹿

月をのみ哀とおもふを小夜更てみやま隠
 に鹿そなくなる

○閑居望月

こけの庵にひとりなかめて年も経ぬ友な
 き山の秋の夜の月

○名所秋月

月みれは衣てさむしさらしなや姨捨山の
 峯の秋風
 山寒み衣てうすし更科やはすての月に
 秋ふけしかは

さゝ波やひらの山風小夜更て月かけさ
ししかのから崎

○秋歌

月清み秋のみいたく更にけりさほの川原
に千鳥しはなく

○月前擣衣

秋たけて夜深き月の影みれはあれたる宿
に衣うつ也
さよ更てなかはたけ行月かけにあかてや
人の衣打らん

夜を寒みね覺てきけは長月の有明の月に
ころもうつ也

○擣衣をよめる

ひとりぬるね覺に聞そ哀なる伏見の里に
衣うつこゑ
みよし野の山下風のさむき夜を誰古郷に
衣うつらん

○秋歌

昔思ふ秋のねさめの床の上にほのかにか
よふ峯の松風

見る人もなくて散にき時雨のみふりにし
 里の秋萩の花
 秋萩のむかしの露に袖ぬれてふるき籬に
 鹿そなくなる
 朝またき小野の露霜さむければ秋をつら
 しと鹿そ鳴なる
 秋はきの下葉のもみちうつろひぬ長月の
 夜の風のさむさに

○雨のふれる夜に菊を見てよめる

露をおもみまかきの菊のほしもあへすは

るれは曇る宵むら雨の空イの村雨

○月夜菊の花を折るとて

ぬれて折る袖の月かけ更にけり籬の菊の
 花の上の露

○ある僧に衣をたまふとて

野邊みれはつゆしも寒し蚕よるの衣のう
 すくや有らん

○長月の夜きりくすのなくを聞てよめる

きりくす夜半の衣の薄き上にいたくは
 霜の置かすもあらなん

○九月霜降秋早寒といふ心を

虫の音もほのかに成ぬ花すゝき秋の末葉
に霜や置らん

○秋のすゑによめる

雁鳴て吹かせさむみ高圓の野への淺茅は
色つきにけり
かり啼て寒きあさけの露霜にやのゝ神山
色つきにけり

○名所紅葉

初鴈の羽風のさむくなるまゝにさほの山

邊は色付にけり

鴈啼て寒き嵐の吹なへに立田の山は色つ
きにけり

○雁のなくをきよてよめる

今朝來なく雁かねさむみ唐衣立田の山は
紅葉しぬらん

○深山紅葉

神無月またて時雨や降にけん深山に深き
紅葉しにけり

○さほ山のはゝその紅葉時雨にぬるゝといふ事を

人々によませしついでによめる

佐保山のはゝその紅葉千々の色にうつろ
ふ秋は時雨降り

○秋歌

木の葉ちる秋の山へはうかりけり堪てや
鹿のひとり鳴らん
もみちはは道もなきまで散しきぬ我宿を
とふ人しなければ

○水上落葉

なかれ行このはのよとむえにしあれば暮

ての後は秋も久しき
暮て行秋の湊にうかふ木のは蟹の釣する
船かともみゆ

○秋を惜しむといふとを

長月の有明の月のつきすのみくる秋とに
をしき今日かな
年毎の秋のわかればあまたあれとけふの
暮るる佗しかりける

○九月盡の心を人々に仰せて。つかうまつらせしついでによめる

初瀬山けふを限となかめつゝ入あひのか
ねに秋と暮ぬる

冬

○十月一日よめる

秋はいぬ風に木のはゝ散はてゝ山淋しか
る冬は來にけり

○まつ風しぐれにたり

ふらぬよもふるともまかふ時雨かな木の
葉の後の峰の松風
神無月木のはふりにし山里は時雨にまか

ふ松の風かな

○冬のうた

木の葉ちり秋も暮にしかた岡のさひしき
杜に冬は來にけり
神無月時雨ふるらしおく山は外山の紅葉
今さかりなり

○冬のはじめの歌

神無月時雨ふれはかなら山のならのはか
しは風にうつろふ
下紅葉かつは移ろふ柞原神無月とて時雨

ふれりてへ

三室山紅葉ちるらし神無月龍田の河に錦

ありかく

吉野山もみちはなかる瀧の上のみふねの

山に嵐吹らし

散つもろ木の葉朽にし谷水も氷てとつる

冬はきにけり

○野霜といふとを

花すゝき枯たるのへに置く霜の結ほほれ

○霜をよめる

東路の道の冬草枯にけり夜な〜霜や置

まざるらん

大澤の池の水草かれにけり長きよすから

霜や置くらん

○月影霜ににたりといふとをよめる

月影のしろきをみれば鵲のわたせる橋に

霜を置きける

○冬歌

夕月夜さほの川風身にしみて袖より過る

千鳥なく也

○河邊冬月

千鳥なくさほの河原の月きよみ衣手寒し
夜や更ぬらん

○月前松風

天原空をさむけみ鳥羽玉のよわたる月に
松風そ吹

○海のほとりの千鳥といふとを。人々あまたつかうま
つりし次に

夜を寒み浦の松風吹すさひむしあけの浪

に千鳥鳴也

ゆふつくよみつしほあひのかたをなみ浪
に志をれて鳴千鳥哉

月清みさよ更ゆけは伊勢島やいちしの浦
の千鳥鳴なり

○名所千鳥

衣手にうらの松風さえわひて吹上の月に
千鳥啼也

○寒夜千鳥

風寒み夜の更ゆけはいもかしまかたみの

浦に千鳥鳴也

七八

○ふかき夜の霜

ぬは玉の妹か黒かみ打なひき冬深き夜に
霜そ置きける

○冬歌

かたしきの袖こそ霜にむすひけれ待夜更
ぬる宇治の橋姫
かたしきの袖も氷ぬ冬の夜の雨降すさむ
曉のそら
夜をさむみ河瀬にうかふ水の泡の消あへ

ぬ程に氷しにけり

○氷をよめる

音羽山やまおろし吹てあふ坂の關の小河
に氷りしわたれりイにけり

○月前嵐

ふけにけり外山の嵐さねく〜てとをちの
里にすめる月かけ

○湖上冬月といふとを

比良の山やま風さむきからさきや鳩のみ
つらみ月を氷れる

七九

○池上冬月

原の池のあしまのつらゝしけゝれとたえはい
く月の影は澄けり

○冬歌

あしの葉は澤へもさやに置霜の寒きよな
く氷しにけり
難波かたあしのは白くおく霜のさえたる
夜半に田鶴そ鳴なる

○夜更て月をみてよめる

小夜更て雲間の月の影みれば袖にしられ

ぬ霜そおきける

○社頭霜

さ夜更ていなりの宮の杉の上に白くも霜
の置にける哉

○屏風に三輪の山に雪のふれる所

冬こもりそれともみえす三輪の山杉のは
白く雪のふれゝは

○社頭雪

みくまのゝなきの葉したり降雪は神のか
けたるしてにそ有らし

○鶴岡別當僧都もとに。雪の降り朝讀てつかはすうた
 鶴か岡あふきてみれば岑の松こすゑ遙に
 雪ろ積れる
 八幡山木たかき松にゐるたつのはね白妙
 にみ雪ふるらし

○海邊鶴

難波かたしほひにたてる蘆たつの羽白妙
 に雪は降つゝ

○冬歌

降つもる雪ふむ磯の濱千鳥波にしをれて

夜半に鳴く

みさこゐる磯邊に立るむろの木の枝もと
 をゝに雪そつもれる
 タされは鹽風さむし波まよりみゆる小鳥
 に雪は降つゝ
 立のほる煙はなほそつれもなき雪のあし
 たの鹽竈の浦

○雪をよめる

なかむれはさひしくも有り烟たつ室の八
 島の雪の下もえ

○冬のうた

八四

夕されは浦風さむしあま小船とませの山
にみ雪降らし
まさもくの檜原のあらしさえくくてゆつ
きか嶽に雪降にけり
深山には白雪ふれりしからきの槇の柚人
道たとるらし
はらへたゝ雪分衣ぬきをうすみ積れは寒
し山おろしの風
槇の戸をあさけの雲の衣手に雪を吹まく

山嵐のかせ

山里は冬ころとにわひしけれ雪ふみ分て
とふ人もなし
我庵はよし野の奥の冬こもり雪ふりつみ
て問人もなし
奥山のいはねに生るすかの根のねもころ
くくにふれる白雪
おのつから淋しくも有か山深み苔の庵の
雪の夕くれ

○寺邊夕雪

八五

打つけに物そかなしき泊瀬山をのへの鐘
の雪の夕暮

○閑居雪

故郷はうらさひしともなき物をよし野の
奥の雪の夕暮

○冬歌

夕されはすゝ吹あらし身にしみて吉野の
たけにみ雪ふるらし
山高み明はなれ行横雲の絶まにみゆる峯
の白雪

見渡せは雲ゐはるかに雪白し富士の高根
の曙の空

さゝのはのみ山もそよに霰ふり寒き霜よ
をひとりかもねん

○山邊霰

雲深きみ山のあらしさえくゝて生駒のた
けに霰ふるらし

○雪をよめる

はし鷹もけふは白班にかはるらんとかへ
る山に雪のふれゝは

○冬歌

雪降てけふともしらぬ奥山にすみやく翁
 あはれはかなき
 炭竈の烟もさひしおほはらやふりにし里
 の雪の夕暮
 わか門の板井の清水冬ふかみ影こそ見え
 ね氷すらしも
 冬深み氷やいたくとちつらん影こそみぬ
 ね山の井の水
 冬ふかみ氷にとつる山河のくむ人なしに

年や暮なむ

ものゝふの八十字治川を行水の流てはや
 き年の暮哉
 白雪のふるの山なる杉むらのすくる程な
 き年のくれかな
 かつらきや山を木高み雪しろしあはれと
 を思ふ年の暮ぬる

○佛名の心をよめる

身に積る罪やいかなるつみならんけふ降
 雪といもにけぬらん

○歳暮

老らくのかしらの雪をとゝめ置きてはか
 なの年や暮て行らん
 とりもあへすはかなく暮て行年をしはし
 とゝめん關守もがな
 ちふさすふまたいとけなきみとり子とと
 もになきぬる年の暮哉
 ちりをたにすゑしとや思ふ行年の跡なき
 庭をはらふ松かせ
 烏羽玉の此よな明そしはくもまた古年

の内とおもはん
 はかなくて今宵明なは行年の思ひてもな
 き春にやあはなん

○賀

千々の春よろつの秋になからへて花と月
 とを君そみるへき
 をとこ山神にそぬさを手向つる八百萬代
 も君かまにく

○松によする祝といふ事をよめる

八幡山こたかき松の種しあれは千とせの

後もたえしとそ思ふ
 位山木たかくならん松にのみ八百よろつ
 代と春風そ吹
 ゆく末も限はしらず住よしの松に幾代の
 年か経ぬらん
 住の江に生てふ松の枝しけみ葉とに千代
 の數そこもれる
 君か代は猶しもつきし住吉の松は百たひ
 生かはるとも

○祝のころを

たつのゐるなからはまの濱風に萬代か
 けて波そよすなる
 ひめしまの小松かうれにゐるたつの千年
 ふれとも年老にけり

○大嘗會のとしのうた

くろ木もて君が造れる宿なれば萬代ふと
 もふりすもあり南

◎梅の花をかめにさせるをみてよめる

玉たれのこかめにさせる梅のはな萬代ふ
 へきかさし成けり

○はなの咲るを見て

宿にある櫻の花は咲にけり千とせの春も
つねかくし見ん

○苔によする祝といふとを

岩にむす苔のみとりの深き色を幾千世と
てと誰か染けん

○二所詣し侍し時

千早振いつのを山の玉椿やほよろつよも
色はかはらし

○月によする祝

万代に見るともあかし長月の有明の月の
あらん限は

○河邊月

ちはやふるみたらし川の底清み長閑に月
の影はすみけり

○いはひのうた

君か代もわか世もつきし石川や蟬の小河
の絶しと思へは
朝にありて我世はつきし天のとや出る月
日のてらん限は

戀

○初戀のころをよめる
春霞たつ田の山のさくら花覺東なきを知
る人のなき

○寄鹿戀

秋の野に朝霧かくれ啼鹿のほのかにのみ
や聞渡りなん

○戀歌

足曳の山の岡尾上イへにかるかやのつかのまも
なくみたれてる思ふ

我戀ははつ山あひの摺衣人ころしらねみ
たれてそおもふ
木隠て物を思へはうつ蟬の羽にをく露の
消やかへらん
かさゝきのはにをく露の丸木はしふみゝ
ぬ先に消やわたらん
月影のそれかあらぬかかけろふのほのか
にみえて雲隠れにき
雲かくれ鳴て行なる初鴈のはつかにみて
そ人は戀しき

○草によせて忍ふる戀

秋風になひくすゝきのほには出す心みた
れて物思ふかな

○風によする戀

あたし野の草のうら吹秋風のめにし見え
ねは知人もなし
秋萩の花のゝ溝露をおもみおのれしをれ
てほにや出なん

○ある人の許へつかはし侍し

難波かた汀のあしのいつまでかほに出す

しも秋をしのはん

鴈のゐるはかせにさわく秋の田の思ひみ
たれてほにそ出ぬる

○戀のこゝろをよめる

小夜更て鴈の翅におく露霜の消ても物はお
もふ限を

○忍ふ戀

時雨ふるおほあらしのゝをさゝ原ぬれは
ひつとも色に出めや

○神無月の頃人のものに

時雨のみふるの神杉ふりぬれといかにせ
よとか色のつれなき

○戀のうた

夜をさむみかもの羽かひに置霜のたとひ
けぬとも色に出めや
蘆鴨のさわく入江のうき草のうきてや物
を思ひわたらん

○海の邊の戀

うきな^{みのみ}みのをしまの海士の濡衣ぬるとな
いひを朽ははつとも

伊勢島やいちしのおまのすて衣あふとな
みに朽やはてなん
淡路島かよふ千島のしはくもはねかく
まなく戀やわたらん

○戀のうた

とよ國のきくのなかはま夢にたにまたみ
ぬ人に戀やわたらん
須磨の浦に蟹のともせるいさり火のほの
かに人を見るよしもがな
あしのやの灘の鹽焼われなれやよるはす

からにくゆり侘らん

○ぬまに寄てしのお戀

かくれぬの下はふあしのみこもりに我を
物思ふ行方しらねは

○水邊の戀

まこも生る淀の澤水みさひゐて影し見ぬ
ねは問人もなし
三島江や玉江のまこもみ隠れてめにし見
ぬねはかる人もなし

○雨によする戀

郭公なくやさつきの五月雨の晴す物思ふ
頃にも有かな
時鳥まつ夜なからのさみたれにしけきあ
やめのねにろなく成
子規鳴やさ月の卯の花のうき言のはのし
けき頃哉

○夏の戀といふ事を

さつき山木の下やみのくらければおのれ
まとひて鳴郭公

○戀のうた

奥山のたつきもしらぬきみにより我心か
 らまとふへら也
 おく山の苔草イふみならずさをしかも深き心
 のほとはしらなん
 天原風に浮たるうき雲の行方さためぬ戀
 もする哉

○雲によする戀

白雲のきえはきえなて何しかも立田の山
 の名のみたつらん

○衣によする戀

わすらるゝ身はうらふれぬから衣さても
 立にし名こそ惜けれ

○戀のころをよめる

君にこひうらふれをれば秋風になひく淺
 茅の露そけぬへき
 物おもはぬ野への草木の葉にたにも秋の
 夕へは露を置ける
 秋の野の花の千草に物そ思ふ露よりしけ
 き色はみえねと

○露によする戀

我袖の泪にもあらぬ露にたに萩の下葉は
色に出けり

○こひのうた

山城のいはたの杜のいはすとも秋の梢は
しるくや有らん

○山家のちのあした

消なまし今朝たつねすは山城の人こぬ宿
の道芝の露

○なてしこによする戀

なてしこの花に置ぬる朝露のたまさかに

たに心へたつな

○草に寄て忍ぶる戀

我戀は夏野の薄しけゝれとほにしあらぬ
は問人もなし

○あひてあはぬ戀

今更に何をか忍ふ花すゝきほに出し秋も
誰ならなくに

○すゝきによする戀

まつ人はこぬものゆゑに花薄ほに出てね
たき戀もする哉

○たのめたる人のもとに

小笹はらおく露さむみ秋されは松むしの
 音に鳴ぬよそなき
 まつよひの更行たにも有物を月さへあや
 なかたふきにけり
 まてとしもたのめぬ山も月は出ぬいひし
 はかりの夕暮の空

○月によする戀

數ならぬ身は浮雲のよそなからあはれと
 そ思ふ秋の夜の月

月影もさやには見ぬすかきくらす心のや
 みのはれしやらぬは

○月のまへのこひ

わか袖におほえす月そやとりける問人あ
 らはいかゝ答へん

○秋のころいひなれにし人のもとへまかれしに、たよ
 りにつけて文などつかはすとて

うはの空に見し俤を思ひ出て月に馴にし
 秋ろ戀しき

逢事を雲るのよそに行雁の遠さかれはや

聲も聞えぬ

○遠き國へまかれりし人。八月ばかりに歸り参るべきよしを申して。九月まで見えざりしかば。人の許につかはし侍しうた

こぬとしもたのめぬうはの空にたに秋風
吹は雁は來にけり
今こんとたのめし人は見えなくに秋風寒
み鴈はきにけり

○かりによする戀
忍ひあまり戀しき時は天原空とふ鴈の音

に啼ぬへし

○戀のうた

海人衣たみのゝしまに鳴たつの聲聞しよ
り忘かねつゝ
難波かた浦より遠になく田鶴のよそに聞
つゝ戀や渡らむ
人しれす思へは苦したけくまのまつとは
またしまてはすへなし
我戀はみやまの松にはふ蔦のしけきを人
のとはすそ有ける

山しけみ木の下かくれ行水の音聞しより
 我やわするゝ
 神山のやました水のわきかへりいはて物
 思ふ我そ悲しき
 昔深き石まをつたふ山水の音こそたてね
 年は經にけり
 あつまちの道のおくなる白川のせきあへ
 ぬ袖をもる涙かな
 忍山下ゆく水の年をへてわきこそかへれ
 逢よしをなみ

もらし侘ぬ忍ふの奥の山ふかみ木かくれ
 て行谷川の水

心をし忍ふの里におきたらはあふくま河
 は見まくちかけん

としふとも音にはたてし音羽河下行水の
 したの思ひを

石の上ふるの高橋ふりぬとももつ人に
 は戀やわたらん

廣瀬川袖つく斗あさけれと我はふかめて
 思ひそめてき

あふ坂の關屋もいつら山しなの音羽の瀧
 の音に聞つゝ
 石はしる山下瀧津山川の心くたけて戀や
 わたらん
 山河のせゝの岩浪わきかへりおのれひと
 りや身をくたくらん
 うきしつみはてはあわとそ成ぬへき瀬々
 の岩波身を碎きつゝ

○戀

しら山にふりて積れる雪なれは下ころき

ゆれうへはつれなし
 雲のゐるよし野のたけに降雪の積りく
 て春にあひにけり
 春ふかみ峯のあらしに散花の定めなき世
 に戀つゝそふる

○月によせてしのぶる戀

春やあらぬ月はみしよの空なから馴しむ
 かしの影ろ戀しき
 思ひきや有しむかしの月影を今は雲るの
 よそに見んとは

○まつ戀の心をよめる

さむしろにひとりひなしく年もへぬ夜の
衣のすそあはすして
小菴にいくよの秋をしのひきぬ今はたお
なし宇治の橋姫
こぬ人をかならず待となけれとも曉かた
に成やしぬらん

○曉の戀

さむしろに露のはかなくおきていなは曉
とに消や渡らん

○曉の戀といふ事を

曉の露やいかなる露ならんおきてしゆけ
はわひしかりけり
曉のしきのはねかきしけゝれとなと逢事
のまとほ成らん

○人まつころをよめる

みちのくのまのゝかや原かりにたにこぬ
人をのみ待か苦しき
まてとしも頼めぬ人の葛の葉もあたなる
風をうらみやはせぬ

○戀のこゝろをよめる

秋ふかみすそ野の眞葛枯くくにうらむる
風の音のみろする
秋の野におく白露の朝なくはかなくて
のみ消やかへらん
風をまつ今はたおなし宮城野のもとあら
の萩の花のうへの露

○きくによする戀

消かへりあるかなきかに物そ思ふうつろ
ふ秋の花の上の霜

花よりも人の心は初霜の置あへぬ色のか
はる成けり

○ひさしき戀の心を

我戀はあはてふる野のをさゝ原幾よまて
とか霜のおくらん

○古郷戀

草ふかみさしもあれたる宿なるを露をか
たみに尋こし哉
里はあれて宿は朽にし跡なれや淺茅か露
に松虫の鳴

あれにけり頼めし宿は草の原露の軒はに
松虫の鳴

忍ふ草しのひくくに置く露を人こそとは
ね宿はふりにき

宿はあれてふるきみ山の松にのみとふへ
き物と風の吹らん

○年を経て待戀といふとを人々におほせてつかうまつ
らせし次に

古郷のあさちか露にむすほれ獨鳴むし
の人をうらむる

○ものがたりに寄る戀

別にしむかしは露か浅茅原あとなき野へ
に秋風さ吹

○冬の戀

あさち原跡なき野へに置く霜のむすほれ
れつゝ消やわたらん
浅茅原あたなる霜のむすほれ日影をま
つに消やわたらん
庭のおもにしけりにけらし八重葎とはて
幾夜の秋か經ぬらん

古郷の杉のいたやのひまをあらみゆきあ
はてのみ年のへぬ蘭

○すだれによする戀

津の國のこやの丸やのあしすたれまとい
に成ぬ行あはすして

○戀の歌

住よしの松とせしまに年も經ぬちきのか
たそき行あはすして
住の江のまつとひさに成にけり來むとた
のめて年の經ぬれは

思ひたえ佗にし物を今更に野中の水の我
を頼むる
をしかふす夏野の草の露よりもしらしな
しけきおもひ有とは
きかてたゝあらし物を夕月夜人たのめ
なる萩の上風

○たなばたによする戀

七夕にあらぬ我身のなそもかく年に稀な
る人を待らん

○戀のうた

我戀は天の原とふあしたつの雲井にのみ
 や啼わたるりないらん
 久かたのあまの川原に住たつも心にあら
 ぬ音をや鳴らん
 久方の天とふ雲の風をいたみ我はしか思
 ふいもにしあはねは
 我戀はかこのわたりの綱手なはたゆとふ
 心やむ時もなし

○こがねによする戀

こかねほるみちのく山にたつ民の命もし

らぬ戀もする哉

逢事のなき名をたつの市にうるかねて物
 思ふ我身成りけり

○雪中待し人と云事を

けふもまたひとりなかめて暮にけりたの
 めぬ宿の庭の白雪

○戀のうた

おく山の岩かき沼に木の葉落てしつめる
 心人しるらめや
 奥山のすゑのたつ木もいさしらす妹にあ

はすて年の経ゆけは
 ふしの根の烟もろらに立ものをなとか思
 ひの下にもゆらん
 おもひのみふかきみ山の郭公人こそしら
 ね音をのみろなく
 名にしおはゝそのかみ山の葵草かけてむ
 かしを思ひ出なん
 夏深き杜のうつせみおのれのみむなしき
 戀に身をくたく蘭
 大あら木のうき田の杜に引しめの打はへ

てのみ戀や渡らん
 それをたに思ふ事とて千早振神の社にな
 かぬ日はなし
 千早振加茂の川なみいくそたひ立かへる
 らん恨しらすも
 涙こそ行方もしらねみわの崎佐野の渡り
 の雨の夕暮
 しらま弓磯邊の山の松のは色新勅の常盤に物を
 思ふ頃かな
 白浪のいそこせちなるとせ河後に逢み

ん身をしたえすは
 わたつ海になかれて出たるしかま川しか
 も絶すや戀渡りなん
 君により我とはなしに須磨の浦に藻汐た
 れつゝ年のへぬらん
 沖つなみ打出の濱のはまひさきしをれて
 のみや年のへぬらん
 かくてのみ有磯の海のありつゝも逢よも
 あらはなにか恨む
 みくま野の浦の濱ゆふいはすとも思ふ心

の數をしらなん

我戀はもゝしまめくる濱千鳥行方もしら
 ぬかたに啼也

おきつ島うのすむ石による浪のまなく物
 思ふ我を悲しき

田子の浦の荒磯の玉も浪の上にうきてた
 ゆたふ戀もする哉

かもめるるあらいそのすさき鹽みちてか
 くろひ行はまさる我戀

武庫の浦の入江のすとり朝なく常にみ

まくのほしき君かな

○旅

玉ほこの道は遠くもあらなくに旅とし思
へはわひしかりけり
草枕旅にしあれはかりこもの思ひみたれ
ていころねられね
旅衣袂かたしきこよひもや草の枕に我ひ
とりねん

○羈中夕露

露しけみならばぬ野へのかり衣ころしも

かなし秋の夕暮
野邊分ぬ袖たに露は置く物をたゝ此ころ
の秋の夕くれ
旅衣うらかなしかる夕暮のすそのゝ露に
秋風そふく

○羈中鹿

旅衣すろ野の露にうらふれて日も夕風に
鹿ぞ鳴なる
秋もはや末野の原に鳴鹿の聲聞時そ旅は
悲しき

ひとりふす草の枕の夜の露ともなき鹿の
涙成けり

○旅宿月

獨ふす草の枕の露のうへにしらぬ野原の
月を見る哉

岩かねの苔のまくらに露おきていく夜み
山の月にねぬらん

○旅宿霜

袖枕霜おく床の苔のうへにあかすはかり
のさよの中山

しなか鳥ひな野の原の笹枕まくらの霜や
やとる月かけ

○旅歌

旅ねする伊勢の濱荻露なからむすふ枕に
やとる月かけ

○旅宿時雨

旅の空なれぬはにふの夜の床わひしさま
てにもる時雨かな

○屏風の繪に。山家に松かける所に旅人あまたある
をよめる

稀に來て聞たにかなし山賤の苔の庵の庭
の松風
まれにきて稀に宿かる人もあらし哀とお
もへ庭の松かせ

雪降山の中に。旅人ふしたる所

かたしきの衣手いたくさえ佗ぬ雪深き夜
の峯の松風
曉の夢の枕に雪積り我ねさめとふ峯の松
かせ

○躡中雪

旅衣夜半のかたしきさえくくて野中の庵
に雪降にけり
あふ坂の關の山道越わひぬ昨日もけふも
雪し積れは
雪降て跡は、かなくたえぬともこしの山
道やますかよはん

○二所へまうでし下向に。春雨いたく降しかば讀る

春雨はいたくな降そ旅人の道行衣ぬれも
ころすれ
春雨にうちそほちつゝ足曳の山ち行らん

山人やたれ

雜

○海邊立春といふとをよめる

しほかまの浦の松風霞なり八十島かけて
春や立らん

○子日

いかにして野中の松のふりぬらん昔の人
はひかすや有けむ

○残雪

春きては花とかみねんおのつから朽木の

柳にふれる白雪

○鶯

深草の谷の鶯春ことに哀むかしと音をの
みそ啼

草ふかき霞の谷に春はくくまるこもる鶯のみやむか
しこふらし

○海邊春月

住よしの松の木かくれゆく月の朧にかす
む春の夜の空

○屏風に加茂へもうてたる所

立よれば衣手涼しみたらしや影見る岸の
松の川波

○海邊春望

難波かた漕出る舟のめもはるに霞に消て
歸る雁かね

○關路花

名にしおはゝいさ尋みむ相坂の關路に匂
ふ花は有やと
尋見るかひはまとに相坂の山ちに匂ふ花
にそ有ける

あふさかのあらしの風に散花をしはしと
ゝむる關守ろなき
あふ坂の關の關やの板庇まはらなればや
花のもるらん

○櫻

いにしへの朽木の櫻春ことに哀むかしと
思ふかひなし
空蟬のよは夢なれや櫻花咲ては散ぬ哀い
つまで

○屏風に春の繪かきたる所を。夏みてよめる

見てのみそおとろかれぬる鳥羽玉の夢か
と思ひし春の残れる

○なてしこ

ゆかしくは行てもみませゆきしまの岩根ほ
に生るなてしこの花

○戀

我宿のませのはたてにはふうりのなりも
ならずも二人ねまほし

○六月稜

わか國のやまと嶋ねの神たちをけふの御

稜に手向つる哉

仇人のあたにあるみの仇とをけふ六月の
はらへすてつといふ

○山家思秋

ことしけき世をのかれにし山里にいか
尋て秋のきつらん
ひとり行袖より置くか奥山の苔の扉の道
の夕露

○故郷虫

たのめこし人たにとはぬ古都に誰松むし

の夜半に鳴らん

○古郷のこゝろを

鶉なくふりにし里の浅茅生に幾夜の秋の
露か置けん

○契むなしくなれる心をよめる

契けむこれやむかしの宿ならんあさちか
原に鶉なく也

○あれたるやどの月といふとを

浅茅原ぬしなき宿の庭の面に哀いくよの
月かすみけん

○月をよめる

思ひ出てむかしの忍ふ袖の上に有しにも
あらぬ月そやとれる
行廻り又もきてみむ古郷の宿もる月は我
をわするな

大原やおほろの清水里遠み人社くまね月
はすみけり

○水邊月

わくらははに行てもみしかさめか井の古き
清水に宿る月かけ

○まな板といふものゝ上に。雁をあらぬさまにして
置たるを見てよめる

あはれなる雲ゐのよそに行雁のかゝる姿
に成ぬと思へは

○聲うちそふるちきつ白浪といふふるとを。人々あ
またつかうまつりてし次によめる

住の江の岸の松吹秋風をたのめて波のよ
るを待ける

○月前千鳥

玉津島若の松原夢にたにまたみぬ月に千

鳥鳴也

○冬初によめる

春といひ夏と過して秋風の吹上の濱に冬
はきにけり

○はまへ出たりしに海士のもしほ火をみて

いつもかく淋しき物か蘆のやにたきすさ
ひたる蜚のもしほひ

水鳥のかものうきねのうきなから玉もの
床に幾よへぬらん

○松間雪

高砂の尾上の松に降雪のふりて幾世のと
しかつもれる

○海邊冬月

月のすむ磯の松風さねく／＼て白くそみゆ
る雪のしら濱

○屏風になちのみ山書たる所

冬こもるなちのあらしの寒ければ苔の衣
のうすくや有らん

○深山に炭やくをみてよめる

炭をやく人の心もあはれなりさても此世

を過るならひは

○あしにわつろふとありて入こもれりし入のもとに。

雪降し日よみて遺す歌

降雪をいかに哀となかむらん心は思ふと
もあしたゝすして

○老人寒をいとふと云事を

年ふれは寒き霜こそさえけらしかうへは
山の雪ならなくに

○雪

我のみそ戀しとは思ふ波のよる山のひた

ひに雪のふれゝは
としつもあるこしの白山しらすともかしら
の雪を哀とはみよ

○老人憐歳暮

老ぬれは年の暮行たひとに我身ひとつと
おもほゆる哉
しらかといひ老ぬるけにやとしあれば年
の早くもおもほゆる哉
打忘れはかなくてのみすくしきぬ哀と思
へ身に積る年

足引の山より奥に宿もかな年のくましき
隠家にせん

○年のはての歌

行年のゆくへをとへは世中の人こそひと
つまうくへらなれ

○雑

春秋はかはりゆけともわたつ海のなかな
る鳥のまつそ久しき

○みさきといふ處へまかれりし道に。磯邊の松とし
ふりにけるをみてよめる

磯の松幾久さにか成ぬらんいたく木高き
風の音哉

○ものまうてし侍し時。磯のほとりに松ひともと有
しを見てよめる

あつさ弓磯邊に立てるひとつ松あなつれ
くけともなしにして

○屏風の歌

年ふれは老にたうれて朽ぬへき身は住の
江の松ならなくに
住の江の岸の姫松ふりにけりいつれの世

にか種はまきけん
豊國のさしの濱松老にけりしらす幾世の
年かへにけん

○屏風の畫に野の中に松三本生たる所を。きぬかぶ
れる女とほりたる

あいつから我を尋ぬる人もあらば野中の
松よみきとかたるな

○かち人の橋わたる所

かち人のわたれはゆるくかつしかのまゝ
のつき橋朽やしぬ蘭

○故郷のこゝろを

いにしへを忍ふとなしに石上ふりにし里
に我はきにけり
いそのかみ舊き宮こは神さひてたゝるに
しあれや人も通はぬ

○相州の土屋といふ所に。年九十にあまれるくちば
うし有。おのづからきたり。むかし語りなどせし
次に。身の立居にたへずなん成ぬる事を。なくく
申して出ぬる時に。老と云事を人々におほせて。つ
かうまつらせし次によみ侍る歌

我幾そみし世のとを思ひ出つ明る程なき

夜のね覺に

思ひ出て夜はすがらにねをそ鳴有し昔の
よゝの古と

中くゝに老はほれても忘れなてなとか昔
をいと忍ふらん
道とほし腰は二重にかゝまれり杖にすか
りてそこまでもくる
さりともと思ふ物から日をへてはしたい
くゝによわる悲しさ

○雑歌

いつくにててもよをはつくさん菅原や伏見
の里もあれぬといふ物を

歎わひ世をそむくへきかたしらす吉野の
奥もすみうしと云か

世にふれはうきとの葉の數ことにたえす
涙の露そおきける

○あし

難波かたうきふししけき蘆のはにおきた
る露の哀世中

○ふね

世中はつねにもかもな渚こくあまの小船
の綱手悲しも

○千鳥

朝ほらけあとなき波に鳴千鳥あなとく
し哀いつまで

○鶴

澤邊より雲ゐにかよふ蘆たつもうきとあ
れや音のみ鳴らん

○慈悲のこゝろを

ものいはぬよものけた物すらたにも哀成

かなや親の子を思ふ

一五六

○道のほとりに。をさなきわらはのはゝを尋ていた
く泣を。其あたりの人に尋しかば。父母なんみま
かりにしとこたへ侍しを聞てよめる

いとほしやみるに涙もとゝまらずおやも
なき子の母を尋ぬる

○無常を

かくてのみ有てはかなき世中をうしとや
いはん哀とやいはむ
うゝつとも夢ともしらぬ世にしあれば有
とて有と頼むへき身か

○わひ人の世に立めぐるをみてよめる

とに角に哀有けるよにし有はなしとても
なき世をもふるかも

○ひごろやまうすとも聞かざりし人。あかつきはか
なく成にけると聞てよめる

聞てしも驚くへきにあらねともはかなき
夢の世に社有けれ

○世間つねならずと云事を。人のもとによみてつか
はし侍し

世中にかしこきこともはわりかなきも思ひし

一五七

とけは夢にそ有ける

○大乘作中道觀歌

よの中は鏡にうつる影にあれや有にもあ
らすなきにもあらず

○思罪業歌

ほのほのみ虚空にみてるあひちこく行方
もなしといふもはかなし

○懺悔歌

塔をくみ堂をつくるも人なけき懺悔にま
さるくとかくやはある

○得功得歌

大日の種子より出てさまやきやうさまや
きやうまた尊形と成

○心のころをよめる

神といひ佛といふも世中の人の心のほか
のものかは

○建曆元年七月洪水漫_レ天。民愁歎せむとをおもひて。

一人奉_レ向_三本尊_一聊致_三祈念_一

時によりすくれは民の歎なり八大龍王雨
やめ玉へ

○人心不常といふ事をよめる

とにかくにあなさをためなの世中や喜ふもの
のあれはわふる物有

○黒

烏羽玉のやみのくらきにあま雲の八重雲
かくれ雁そ鳴なる

○白

かもめゐる沖のしらすに降雪の晴行空の
月のさやけさ

○ある人みやこのかたへのぼり待しに。たよりにつ

けてよみてつかはす歌

夜をさむみひとりねさめの床さねて我衣
手に霜そをきける
かゝるをりも有ける物を手枕の隙もる風
を何いとひけん
岩根ふみ幾への峯を越ぬとも思ひも出は
心へたつな
宮古より吹こん風の君ならば忘なとたに
いはまし物を
打絶て思ふはかりはいはねとも便につけ

て尋ぬ斗そ

宮古へに夢にもゆかん便あらは宇津の山
風吹もつたへよ

○五月の頃陸奥へまかれりし人のもとに。あふぎな
とあまたつかはし侍し中に。郭公かきたる扇にか
きつけ侍し歌

立別因幡の山の郭公まつとつけこせかへ
りくるかに

○ちかうめしつかう女房。遠き國へまからんといと
ま申侍しかは

山遠み雲井にかりの越ていなは我のみひ

とりねにや鳴なん

○遠き國へまかれりし人のもとより。みせはや袖の
など申おこせたりし返ごとに

我ゆゑにぬるゝにはあらしから衣山路の
苔の露にそ有けん

○しのびていひわたる人有き。はるかなるかたへゆ
かんといひ侍しかば

ゆひそめて馴したふさの小むらさき思は
す今にあさかりきとは

○山の端に日の入を見てよめる

くれなるのちしほのまふり山の端に日の
入ときの空にそ有ける

○二所詣下向に。はまへの宿のまへに前川と云川あり。雨降て水まさりにしかば。日暮てわたり侍りし時よめる

濱邊なる前の川瀬を行水のはやくもけふ
の暮にける哉

○相摸川といふかはあり。月さし出て後。船にのりてわたるとよめる

夕月夜さすや川瀬のみなれ棹なれてもう
とき波の音哉

○二所下向後朝に。さふらひとも見えざりしかば
旅を行し跡の宿守おれのイくにわたくしあ
れや今朝はいまたこぬ

○民のかまどより烟の立を見てよめる

陸奥に爰やいつくしほかまの浦とはなし
に烟立みゆ

○またのとし。二所へまいりたりし時。はこねのみ

づらみを見てよみ侍る歌

玉くしけ箱根のみらみ海はイけれあれや二國
かけて中にたゆたふ

○箱根の山を打いて、みれば。浪のよるこじまあり。
ともものものに此海の名はしるやと尋しかば。伊豆
の海となん申とこたへ侍しを聞て

箱根路を我越くれは伊豆の海や沖の小島
に波のよるみゆ

○朝ぼらけ。八重のしほち霞わたりて。空もひとつ
にみえ侍しかばよめる

空や海波やそらともえそわかぬ霞も浪も
立みちにつゝ

○あら磯に波のよるを見てよめる

おほ海の磯もとゝろによするなみいよる浪のわれてく
たけてさけて散かも

○走湯山に参詣の時歌

わた津海の中に向ひて出るゆのいつのお
山とゝへもいひけり
伊豆の國山の南に出るゆのはやきは神の
しるし成けり
はしるゆの神とはうへも云けらしはやき
験のあれはなりけり

○神祇

瑞籬の久しき代よりゆふたすきかけし心
は神を知らん
里みこかみゆたてさゝのそよ／＼になひ
き起ふしよしや世中
かみつけのせたのあかきの神社やまとに
いかて跡をたれけん

○法眼定恩にあひて侍し時。大峯の物語などせし聞
て後によめる

幾かへりゆきゝの峯のそみかくたすゝか
け衣きつゝ馴けん

すゝかけの苔折きぬのふる衣いく木の本
にきつゝ馴けん
奥山の苔の衣に置く露は泪の雨のしつく
成けり

○那智瀧の有さまかたりしを

三熊野のなちのをやまに引しめの打はへ
てのみおつる瀧哉

○三輪のやしろを

今つくる三輪のはふりかすき社過にし事
はとはすともよし

○加茂祭歌

葵草かつらに掛けて千早振賀茂の祭をね
るやたか子そ

○社頭松風

ふりにけるあけの玉かき神さひてやれた
るみすに松風を吹

○社頭月

月のすむ北野の宮の小松原幾代をへてか
神さひにけん

○神祇

月さゆる御裳濯川の底清みいつれのよに
かすみはしめけん

いにしへの神代の影を残ける天の岩戸の
明方の月

八百萬よもの神たちあつまれり高天原に
きゝたかくして

○伊勢御遷宮の年のうた

神風や朝日の宮の宮うつしかけ長閑なる
世にこそ有けれ

○述懐

君か代になほなからへて月清み秋のみ空
の影をまたなん

○太上天皇御書下預時歌

大君の勅をかしこみちゝはゝに心はわく
とも人に云めやも
ひんかしの國に我をれは朝日さすはこや
の山のかけと成にき
山はさけ海はあせなん世成とも君にふた
心我あらめやも

右鎌倉右大臣集以三一本及流布印本一校合了

一本及印本所載歌

○梅の花をよめる

咲しよりかねてそをしき梅花ちりのわか
れは我身と思へは

○春の歌

このねぬる朝けの風にかをる也軒はの梅
の春の初花

○雨中柳

青柳の糸よりつたふ白露を玉とみるまで
春雨そふる

○落花をよめる

咲はかつうつろふ山の櫻花花のあたりに
風な吹そも
みちすから散かふ花を雪とみてやすらう
程に此日暮しつ

○櫻をよめる

櫻花さける山路や遠からん過かてにのみ
春の暮ぬる

○水底の山吹と云事を。人々あまたつかうまつらせ
し次に

聲高み蛙なくなり井出の河岸の山吹今は
散らん
立歸りみれともあかす山吹の花散きしの
春の川浪

○歎冬に風の吹を見て

我心いかにせよとか山吹の移ふ花のあら
し立らん

○三月盡

朝きよめ格子なあけそ行春を我園のうち
にしはしとゝめん

○卯花

我宿の垣根に咲る卯花は憂事しけき世に
こそ有けれ
神まつる卯月になれはうの花のうき言の
葉の敷やまさらん

○深夜郭公

五月やみ小夜更ぬらし郭公神なひ山にお
のが妻よふ

○郭公

玉くしけ箱根の山の郭公むかふの里に朝
なくなく

○照射

五月山おほつかなきを夕月夜木隠てのみ
鹿や待らん

○蟬

泉川はゝそのもりになく蟬の聲のすめる
は夏のふかさか

○夏の暮によめる

御後する萱か軒はに引してのまつはれつ
きて夏をとゝめん

○詞書闕

今よりは涼しく成ぬ日暮しのなく山陰の
秋の夕風

○蟋蟀

秋の夜の月の都のきりくすなくはむか
しの影や戀しき

○菊を

ませの内に夜置露やいかならんぬれつゝ

菊のうつろひにける

○秋の末によめる

はかなくて暮ぬと思ふをものつから有明
の月に秋を残れる

○初冬歌の中に

夕つく夜澤邊にたてるあしたつの鳴音悲
しき冬ろきにける

初しくれ降にし日より神なひの杜の梢を
色まさり行

○霰

武士のやなみつくろふこての上に霰たは
しるなすのしの原
笹の葉に霰さやきてみ山への峯の木枯し
きりてそ吹

○雪

久かたのあま雲あへり葛城や高まの山は
み雪ふるらし

○建暦二年十二月雪のふり侍ける日。山家の景氣を
見侍らんとて。民部大夫行光が家にまかり侍ける
に。山城判官行村などあまた侍り。和歌管絃の遊
ありて。夜更て歸侍しに。行光黒馬をたひけるを。

またの日見けるに。たつかみに紙をむすび侍るを
みれば

此雪を分て心の君にあればぬししる駒の
ためしをそひく

返し

ぬししれと引ける駒の雪を分はかしこき
跡にかへれとそ思ふ

○建保五年十二月方違のために。永福寺の僧坊にま
かりて。あした歸り侍るとて。小袖をのこしおきて

春待て霞の袖にかさねよと霜の衣のおき

てこそゆけ

○戀歌の中に

はみのほるあゆすむ川の瀬をはやみはや
くや君に戀渡りなん
夕月夜おほつかなきを雲まよりほのかに
みえしそれかあらぬか
かれはてん後しのへとや夏草のふかくは
人のたのめおきけん
今さらにわか名はたゝしかはらやの下し
く烟くゆりわふとも

もしほ焼蟹のたく火のほのかにも我思ふ
人をみるよしもかな
足曳の山にすむてふ山かつの心もしらぬ
戀もするかな
風吹は浪うつきしの岩なれやかたへも有
か人の心の
よそにても有へき物を中々になにしか人
にむつれそめけん

○名所戀の心をよめる

須磨の浦にあまのともせる漁火のほのか

に人をみるよしも哉
から衣きなれの里に君をおきてしま松の
木のまてはくるしも
我せこをまつちの山の葛かつらたまさか
にたにくるよしもがな
水莖の岡邊のまくす枯しより身を秋風の
吹ぬ日はなし

○忍戀

時雨ふる秋の山へにおく霜の色にはいて
し色にいつとも

○寄月待人

忍ふれはくるしき物を山端にさし出る月
の影にみねなん
恨わひまたしと思ふ夕へたになほ山のは
に月は出にけり

○寄露戀

色をたに袖よりつたふ下萩の忍びし秋の
野への夕露

○今もみてしか山かつのといふ事を

山賤のかきほに咲るなてしこの花の心を

知人のなき

○ある人のもとにつかはし侍し

秋の田のほの上にかくさゝかにの糸我
はかり物はおもはし

○旅の心を

草枕たひにしあれば妹にこひさむるまを
なみ夢さへみぬす
東路のさやの中山こねていなはいとゝ都
や遠さかりなん

○旅泊

湊區いたくな吹そしなか鳥いなのみつら
み舟とむるまで

やしのさき月影さむしおきつ鳥鴨といふ
舟うきねすらしも

○素還法師物へそかりけるにつかはしける

おきつ浪八十島かけてすむ千鳥心ひとつ
といかゝたのまん

返し

濱千鳥八十島かけてかよふともすみこし
浦をいかゝわすれん

○秋の比いひなれたる人のもとへまかりしに。便につけて文などつかはすとて

思ひ出よみしよはよそに成ぬともありし名残の有明の月

○建保六年十一月素還法師(于時胤行)下總國に侍しころ。のぼるべきよし申つかはすとて

戀しともおもはていかゝ久かたの天照神も空に知らん

○松間雪

雪積るわかかの松原ふりにけり幾代へぬら

ん玉津島守

○社頭夏月

なかむれは吹風すゝしみわの山杉の梢をいつる月かけ

○寄松祝といふとを

田鶴のゐるなからの濱の濱松の待とはなしに千世をこそふれ
行末の千とせをこめて春霞立田の山に松風そふく

○障子の繪に。岩に松の生たる所

岩の上に生る小松の年も経ぬ幾千世まで
と契りあきけん

○寄竹祝

竹の葉に降おほふ雪のうれをおもみ下に
も千世の色は隠れす
なよ竹のなゝの百そちおひぬれとやその
ちふしは色も變らす
弱竹のちゝのさ枝のはゝ枝のをのふしふ
しによゝはこもれり
あひ生の袖のふれにしやとの竹よゝはへ

にけり我友として

○大嘗會のとしの歌

今つくる黒木のむろやふりすして君はか
よはん万代までに

○慶賀の歌

宮はしらふとしき立て万代に今をさかえ
むかまくらのさと

金槐和歌集畢

鎌倉右大臣家集のはじめに

しるせる詞

加茂真淵

いにしへよりうつろひ來にし世々のあり
さまを見るべきものは歌なり。いにしへの
天皇。ことゝある時は。大御手に弓とりまば
り。大御そびらにゆぎかきおばして。いかく
をしき御いづをもてちはやぶるあらぶ